



大方あかつき館報

第24号
2016年3月発行

あかつき

そんなに文壇で脚光を浴びていたわけではありません。けれども昭和7年に『薔薇盗人』が川端の推奨を受けます。昭和9年に改造社を退社し筆一本の生活に入ります。同年帰郷し、その時に鬱屈したかなり精神的に大変な時期を過ごすわけです。けれどもこの一人であった時、一番困窮した時代に上林は自分の文学を見つめなおし、そこでより強靱な精神と言いますか、そういうものを身につけていきます。

困難な時代の中にあつて

僕やたぶんピンボンズさんが上林に惹かれるのは、こうした難しい——今も僕は生きるのがとても難しい時代だと思っていて、そういう風に生きていけばいいのかわからないわけです。一方でインターネットが盛んになって毎日のように情報が出てくる中で、どういうふう生きていけばいいのかわからない。そのなかで僕もそうですけども、沈黙して自分のスタイルを見つけないといけない。そうした中で上林のところに初期の作品を読むと、とても励まされる気持ちするわけですね。そこが上林の魅力のなかで見過されてきたというわけではな

いとは思いますが、けれども、より光を当てていくべきところではないかというふうに僕は思っています『星を撒いた街』というものを作りました。

ご存じのとおり、帰郷してから上林は作家としてどんな息を吹き返していきます。たとえば毎年のように本を出していくんですね。これはびっくりするくらいで昭和13

文学講座 講演

「うずもれた名作をとどけたくて」

これは、二〇一五年度上林晩文学館「第一回文学講座」で講演されたものです。紙面の都合上、講演後半の主に上林に関連した部分だけを抜粋し掲載しています。



講師

島田 潤一郎さん
(夏葉社代表・東京都在住)

日時／2015・10・17(土)
14:30～17:00

会場／あかつき館1F
レクチャーホール

私小説のなかに活路を

上林と同年代の作家たちは、プロレタリアに行くか新感覚派に行くかというふうに分かれていくわけです

ね。そこで、自分たちの文学を立てていかなければならなかった。重要なのはそういうふうプロレタリアに行ったり新感覚派に行ったり作家たちについていうのは、どれも、川端や中野重治こうした大物を除いて続々と筆を折る、ないしはどんどん低調になっていくなかで、上林が私小説の中に活路を見出していくというの、とても重要だと思います。

このなかで上林は自分の小説の作法、自分がやらなければいけないことを見つけていくんですが、デビュー自体は昭和6年の『櫻日記』でデビューします。上林は書いていますけれども『第1作「櫻日記」』がもつとまじな作品だったから処女作で出世作であるといってもいいわけだが、残念ながら出来ない作品だったからそれが言えないのである』というふうに書いています。ですからデビュー自体は、



「紅い花」を歌う世田谷ピンボンズさん



年に『田園通信』、翌年『ちちはの記』、その翌年に『野』で、次にその翌年に『悲歌』、『流寓記』『明月記』『機部屋三昧』『夏曆』というふうに毎年出版していきます。これは全部読んでほしいと思いますが、そういった作品です。その中で昭和14年奥様が発病されます。生活も困窮を極めます。その中で彼は文学を、本を頼りに生きていくわけですね。うまく言えないですけども僕は感動してしまうし、上林のように強く生きていきたいなというふうに思うわけです。

上林文学のいちばんの魅力

作家の特徴としては、浅見淵が病妻ものに関してこういう事を述べていて、これはそのとおりだなと思うんですが、『特筆すべきはこれら病妻ものが題材は深刻なのにもかかわらず筆触は透明で明るく陰惨味がほとんど感じられぬことだ。このことは上林暁が南国の土佐育ちであることや生まれつきの向日性に富んでいることなどと相俟って迷いや韜晦を許さぬ意志の強さを持っていることに起因している』というふうに書いています。これはまさにその通りだなというふうに思います。

この中（『星を撒いた街』）にもいわゆる病妻ものを収録していますけれども、書いていることは本当に深刻なことであるし、哀しいことだけれども、その哀しさの中から透明なものを見つけ出すその透徹した目と



講師・島田潤一郎さん

いうものが、やっぱり僕は上林の一番の魅力ではないかというふうに思います。繰り返しになりますが、それでも、人生が困難な時にそれを乗り越えるための文学として、上林暁がず

うっと培ってきたそうした小説群というのは、この時代だからこそより価値の出ているものではないかというふうに思うわけです。派手な作家たちが残した物というものももちろんそれは素晴らしいものも多々ありますけれども、点で見るとではなく線で上林暁がどういう風な経緯をたどって文学をより良いものにしていくというそういう姿勢というものが、本当に素晴らしいと思います。

『故郷の本箱』に、上林暁が残している文章で僕はこれをよく思い出しますが、これは若いとき昭和10年代に書いていますが、『僕は将来自分が立派な作品を書いてもはやされたりなどしたいとは思わぬ。ただこつこつと努力を重ねていつて最後まで少しづつでも登っていく作家になりたい。ある一時期を峠として次第に下り坂になっていく作家の部類には属したくない。実際僕は自分が息を引き取る時を自分の峠にしたいと思っています』というふうに書いています。こうしたことを若い時にはなかなか書けないけれども、上林に関してはそれはいつさい揺るがなかったじゃないでしょうか。



昭和21年に奥様が38歳で亡くなります。その後、昭和22年酒場をめぐる作品を数多く発表して、これも非常にいいんです。ちくま文庫に『禁酒宣言』という名短編集がありますが、これが復刊されましたので、これもぜひ読まれると上林のユーモアのあるところも含めて、上林ってこういう作家なのかっていうふうに驚くこともあると思います。昭和32年55歳の時に『春の

坂』これも素晴らしい作品で、僕が大好きな昭和49年病で倒れて半身不随になってからの『上野桜木町』、昭和49年に『極楽寺門前』これも大好きな作品ですが、こういうものをずっと77歳で亡くなる数日前まで書いていたのが上林なわけです。

言葉を大切に作る作家

僕も全部読んでるわけではないですけども、倒れてから故郷を思い出するように、故郷をデッサンするように、そこに形を与えるようにして書いている――その故郷を描いたものを僕は最近読んでいて、それを読むと何度読んでも読み返しても飽きることはないんですね。これも同じ先ほどの浅見淵の言葉を借りますと『質実だがどこか都会生活にむしろまれている作家生活を中心とした身辺物と田舎の肉親や人物をうつした新鮮な空気の郷土物とが絶えず入り混じって、そこに現代人を憩わせる独特の滋味を醸し出しているのが大きな特色』というふうに書いています。これもまさにその通りだと思います。

僕はこの講演のために一生懸命勉強してこういった言葉を探してきたわけですけども、よく上林のなにごとかが一番好きですかと言われると、本当に答えに迷うんですね。全部いいんですけども、で、何か一番お奨めの作品はどれですかって言われると、一般には病妻ものをと言われてますけれども、それだけだとあまりにももったいない作家であるというふうに思います。ですから、欲を言えば全部これからも読んできたいし、皆さんにも読んでいただきたい。そうすると、ほんとうに何度でも湧く泉のように上林っていうのは我々に生きる力を与えてくれるんじゃないかかというふうに思います。僕は読んでいて自分なりの感想としては、上林は言葉を大切に作る作家であつた

というふうに思います。たとえば、川端とか新感覚派の作家たちが新しい言葉を作ろうとして新しい文学を作ろうとそういうふうにな身を削ったところ、上林は平明なやわらかい言葉をずっと丹念に作り続けた作家だからこそ読んでも読んでも飽きないというふうに思います。そうするとどういうふうにな自分なりに結論付けたかというところ、上林は言葉を大切に、言葉を大切にするという事は自分を大切にすることであり、その身の回りの人を大切にすることであり、故郷を大切にすることであるというふうに思います。上林はまさにそういう生き方をしてきたし、そういうものを最初から最後までぶれない強い精神力を持ってやっていましたが、そういったブレない精神力っていうのは若い時に文学一本でやっていくこうと思って、様々な困難を筆で乗り越えていったからだというふうに思います。



上林の娘・伊禰子さんと孫・平城さん

まとめにかえて

実際自分てこういうふうな本（『星を撒いた街』『故郷の本箱』）を出して、若い人たちが上林文学に勇気づけられるというふうな現実をとて幸せに思っています。結論として何を申し上げたいかというと、僕も「七度生まれ変わったとしても文学をやりたい」というふうな思っています。ありがとうございます。

2015年度・主な催しもの

文学館企画展

第18回企画展

「ぼくはがんばりゆう」

『県こども詩集『やまもも』38年の歩み』

期間 4/1～6/28

同時開催 ▶ 『青柳裕介・イラスト原画展』

特別企画展

「あつよしの夏」

『四万十川の作家・笹山久三』

期間 7/3～9/30

同時開催 ▶ 本田祐造写真展・「四万十の四季」

第19回企画展

「書くために生きる」

『館所蔵・上林晩生原稿展』

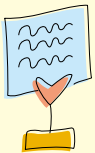
期間 10/4～12/27

第20回企画展

「父が残した戦場日記」

『ニューギニア飢餓の戦場から、故郷へ』

期間 2016 1/10～3/27



文学館・顕彰会など

◇第12回上林晩忌短歌大会（詳細は、4面参照）

◇上林晩文学講座

（1Fレクチャーホール）

＊第一回 10/17（土） 14時半～17時

「うずもれた名作をとどけたくて」

講師 島田潤一郎さん（夏葉社代表）

＊第二回 2/6（土） 14時～16時

「祖父たちの戦争を語る」

講師 福田 仁さん（高知新聞社）

◇上林晩の作品を読む会

（2F会議室／14時～16時）

＊第9回 5/16（土）「星を撒いた街」

＊第10回 8/29（土）「白い屋形船」

＊第11回 11/19（木）「散策・トンネルを訪ねて」

＊第12回 2/20（土）「トンネルの娘」

◇第26回あかつき賞表彰式

日時 3月5日（土） 14時半～16時

会場 1Fレクチャーホール



第20回企画展「父が残した戦場日記」



2015年度＊館の催し点描

第12回上林暁忌短歌大会

7月24日(金)、上林暁を偲び短歌大会が、町保健福祉センター・大ホールで開催されました。

選者に、『泥と青葉』で昨年斎藤茂吉短歌文学賞を受賞された小島ゆかりさん(「コスモス」選者)をお迎えし、「歌を楽しむ」と題してご講演もいただきました。

特選には、入交京子さん、藤近容子さん、小橋芙沙世さんらの3首が、他に、植田馨賞1首、秀作5首、佳作10首が入賞作品として選ばれました。



～～～ ＊ ＊ ＊ ～～～ ＊ ＊ ＊ ～～～

図書館企画展

サンタがあかつきにやってくる

～光の切り絵イルミネーション～

光の切り絵作家・酒井敦美さんによる「光の切り絵ミニシアター～サンタさんからの贈り物～」と「野外幻灯展」が、12月5日(土)開催されました。

1500名を超える方々が、レクチャーホール内や野外の芝生、壁面、階段に次々と映し出される色鮮やかな「光の切り絵」に魅せられ酔いしれました。



特別企画展

『あつよしの夏』
～四万十川の作家・笹山久三～

生まれ育った四万十川やそこに暮らす人々をこよなく愛し、作品に描いてきた笹山久三さん。坪田譲治文学賞を受賞した代表作「あつよしの夏」などの生原稿や著書、写真など数十点の資料を展示し、期間中は950名余の方々にご観覧いただきました。

(展示期間 7/3～9/30)

また、地元の写真家・本田祐造さんの写真展「四万十の四季」も同時に開催されました。



～～～ ＊ ～～～ ＊ ～～～ ＊ ～～～ ＊ ～～～ ＊ ～～～

館長日記

～ブログ『クジラのあくび』より～

花はいう あなたはこころ 2015.10.27

K古書店のMさんから通信が送られてきた。町民大学の帰路、ピンボンズさんが立ち寄られたらしい。1008号のタイトルは、『世田谷ピンボンズさんの印象』となっていた。堀口大学の詩「人に」が載せられている。

『花はいう そして匂い/あなたはこころ/そして やさしさ』たった三行読むだけで、私の心はおだやかな気持ちになる。ピンボンズさんの印象とも重なって味わい深い1号である。

『昨今のブームで参ったのではありませんね!』(高知市・T)文学館芳名帳にこう記されていた。古くからの上林ファンの矜持を見たおもしろい。

しっかりと受けとめ、文学館の歩みをすすめていきたい。

ガラス一枚の掃除にも 2016.01.18

朝一番、エントランスホールの花々に水をやる。その後、2F文学館に上がって展示ケースのガラスをふく。

指の跡がたくさんついている。これは、熱心に展示を観て下さった証し。ガラス一面ちいさな唾の跡がひろがっている。これも、楽しくおしゃべりしながら資料を観て下さった証し。汚れていればいるほど、たくさんの方々が訪れたことを物語っている。

ガラス一枚の掃除にも、発見とひそかな楽しみがある。